

Nature 誌へのある科学者の書簡を読み直す ～テロの21世紀と科学者のアイデンティティに思うこと～

宮野 佳¹⁾, 本田蘭子²⁾

1) 川崎医科大学 生化学教室

2) 広島大学 教養教育

(令和元年10月23日受理)

Re-read a scientist's Correspondence to *Nature*

～Discussion about the 21st century of terrorism and the identity of scientists～

Kei MIYANO¹⁾, Ranko HONDA²⁾

1) *Department of Biochemistry, Kawasaki Medical School*

2) *Liberal Arts Education, Hiroshima University*

(Accepted on October 23, 2019)

概 要

2001年9月11日, アメリカ同時多発テロが発生すると, その衝撃に科学界を含めた世界中から声明が寄せられた。中でも*Nature*誌に掲載された一通の書簡には, 科学に携わる者にとって考えさせられるものがあつた。「科学は普遍的であり, いかなる宗教の一部でもない」とタイトルされたこの書簡の著者は, イスラエルの生化学者Edgar Pick。彼は, およそ2か月前の同誌*Nature*に編集部の見解として既に掲載されていたOpinion articleに対して, 批判的な書簡を投稿したのである。

20年近く経てなお, テロの脅威が一向に減じることのない現在, このピック書簡を読み直すことは, 一定の価値があるように思われる。したがって本稿では, 主にピック書簡の紹介を通して彼の主張を考察する。その過程で, 元となったオピニオン記事の概要を示したり, E・W・サイドやブッシュ大統領(当時)の言葉を引用したりすることによって, ピック書簡の解釈に普遍性を見出す。こうした回想の機会を共有することが, 科学に携わる者としての在り方に想いを致す, そのきっかけに資することを期待するものである。

キーワード: エドガー・ピック, *Nature*誌, 生化学, アメリカ同時多発テロ

Abstract

Unfortunately, the September 11 attacks were a symbolic event for the dawn of the new century. The impact of the terror attacks on the scientific societies forced some scientists to express their thoughts openly. Among those statements was a Correspondence published in *Nature*, to which I was attracted at the time. The author was Edgar Pick, a famous biochemist at Sacker School of Medicine, Tel Aviv University in Israel. He replied sharply to an Opinion article "Fighting against terrorism, engaging with Islamic science", which had been published soon after the attacks, 20 September, in the same journal.

Now, about 20 years after the event, most people still agree that the terrorism is not only the worldwide problem but also the urgent one. Under such circumstances, as one of those engaged with science, what action or inaction could you take? Clearly, this is not a simple matter, but to be worth considering. On this paper I introduce and re-read the Pick Correspondence, titled "Science is Universal, not part of any religion". Specifically, first I refer to the chemical terrorism ever happened in Japan, next I introduce the Pick Correspondence by translating it into Japanese, then outline the Opinion article, and lastly give my overall opinion on the subject. I would like to share the opportunity to keep questioning the matter.

Key words: Edgar Pick, *Nature*, biochemistry, September 11 attacks

1. はじめに

残念なことではあるが、21世紀の幕開けを象徴したのは他でもなく、ツインタワーへの旅客機の突入とそれに続く無残な超高層ビルの崩壊だった。2001年9月11日、この日付は世界中の人々の心に克明に刻まれ、もはや国家・民族・団体等の主張は、一応の国際法に従う戦争という一つの「外交の場」から、「礼儀知らずの」殺人や破壊行為であるテロにおいてなされるようになった現実を、否応なく見せつけられたのである。このアメリカ同時多発テロ発生直後から、さまざまな人がさまざまな場で語る中、科学界からも声が寄せられた。例えば、早くもテロ発生の翌週号の*Nature*誌には、このテロに対する編集部の見解がOpinion article (以下「オピニオン記事」とする、なお署名がないため著者は「編集者」とする)¹⁾として示され、約2か月後となる11月発刊の同誌には、一転、そのオピニオン記事に対する返信として、イスラエルのある科学者からの批判的なCorrespondence (以下「書簡」とする)²⁾が投稿された。

既にあれから20年ほどたった今、当時の科学界の反応の一端を、この書簡の全文を紹介することで振り返りたい。その後の度重なる世界的なテロ事件の発生と、非寛容で排他主義的主張や社会的分断を目の当たりとする現在、こうした回想の機会を共有することが、今後の在り方を考えるうえで一助になることを期待するもの

である。本稿ではまず、導入として「科学とテロ」でかつて日本で起こった化学テロに言及し、次いで「ピック書簡」を日本語訳で紹介、さらにこの書簡の印象とその元となった記事の概要を「オピニオン記事」で取り上げ、最後に「科学は普遍的」で今回の所感を述べる。

2. 科学とテロ

アメリカ同時多発テロ後、実行犯が次々と特定され、彼らの用いた手段が報道されるにつれて、社会的には多少の驚きをもって受け止められていたように思う。いわゆるマイノリティーとして、貧しく厳しい生活の中で希望を見いだせず、結果として急進的な反米イデオロギーに染まったのだろうという、ステレオタイプ化された犯人像との違いが浮き彫りになってきたからである。彼らの大半は、高い水準の教育を受け、欧州で生活し、英語に堪能で、疑われることなくアメリカの飛行訓練を受けるに至っていた。しかし、こうした実際の犯人像は、私にはかつて日本で起こった化学テロ事件を彷彿とさせるものでもあった。

90年代中頃、松本サリン事件(1994年)と地下鉄サリン事件(1995年)という国内最大のテロ事件が発生し、その凄惨さと同時に、サリンという化学兵器が用いられたことに衝撃が走った。サリンはアセチルコリンエステラーゼの阻害剤だが、実は有機化学に携わる者だけでなく、

生化学者もこの構造には馴染みが深い。例えば、サリンに構造がよく似たdiisopropyl fluorophosphate (DIFPまたはDFP) は、生体からのタンパク質精製の過程で強力かつ安価な（この場合、需要ではなく合成の容易さが反映される）タンパク質分解酵素阻害剤として使用されるからである。

テロを首謀した団体が、特に理系の大学・大学院卒の若者（合成に従事させるために）と医師（効果を判定させるために）をリクルートしたことが明るみに出ると、世間の関心は次第に、なぜ高学歴の者がこの団体に魅入られ、凄惨なテロに手を染めるまでに至ったのか、という疑問に移った。知性や知識が、非人道的行為を抑止する力とはならなかったのみならず、江川の書籍によれば、彼らの純粋な好奇心や探究心が（マインドコントロール下の可能性もあるが）その背景にあったのかもしれないという一つの解釈も提示された^{註1)}。いずれにしても、こうした行為の一方には個人のアイデンティティに絡む宗教や思想が、また他方にはその手段としての科学的知識や経験があった。

科学とテロを含む暴力という負の関係性は複雑かつ極めて難しい問題である。その本質として歴史的問題でもある。後に言及するオピニオン記事でも触れられているが、例えば第二次世界大戦中、レーダーや戦闘機の開発、暗号解読、そして原子爆弾の製作に心血が注がれ、結果として、そうした技術開発のスピードと使用が戦果を決定づけた。科学者のアイデンティティは、自制心を含む倫理観や思想、宗教といった世界観だけではなく、世界情勢や政治的國家戦略と結びついてしまうことがある。

3. ピック書簡

*下線部 [P①～⑧] は筆者によるもので、この後に言及する個所である。

Title: 科学は普遍的であり、いかなる宗教の一部でもない ～イスラムは科学の勃興に寄与したが、今やそれは一つの文化を超えて成長していることを誇りに思うべきである～²⁾

Sir, 貴殿のオピニオン記事である『テロとの戦い、イスラム科学に関わって』¹⁾の中で、貴殿は読者に次のようにおっしゃいます、科学者として、我々は現在の「争い (conflict)」(“争い”という言葉は、一般市民に対する謂れのない攻撃を指すものとしては美しい表現 (a noble euphemism) ですね [P①]) に巻き込まれた社会のために、より多くのことができる、そしてまた、何の罪もない人を無差別に殺害するのは文明の衝突の結果ではない、と。

貴殿はおっしゃる：「多くのイスラムの学者や指導者が強調しているのは、無実の者たちの命を奪うことは、他のいかなる信仰に対する攻撃であるのと同じように、我々の信仰に対する攻撃でもある」、と。人々の命を奪うことが悪であるのは自明のことですから、わざわざ学者や指導者たちがことさらに直す必要すらほとんどないのではないのでしょうか、イスラムだろうがアイランドだろうが^{註2)}。貴殿はさらに続けておっしゃいます：「再起したイスラムは、価値観というものを与えているように思われる…自分たちの国に抑圧されていた…人々に」、そしてまた、革命的な目的（あるいはこれを『テロリズム』と呼ぶ人もいるでしょうが）は一部の限られた活動的グループにとってだけ、ちょっとした気晴らしなのだ、と。簡単に言うと、貴殿は私たちに申し付けているのです、旅客機を摩天楼に突っ込ませることによって、イスラムとして文化的アイデンティティが高められた人々への理解を持つべきだ、と [P②]。

貴殿の記事には、イスラムと西洋の科学間の衝突に対する分析の一環として、二つのウェブサイト URL が示されています。一つ目の

ウェブサイトは、この問題に対するDr. Mehrzad Boroujerdiによる独自でバイアスのない議論が掲載されています：二つ目のウェブサイトは、講義メモに基づいて貧相に焼き増されただけのスピーチですが、その特徴は極めて政治的でレトリックなものである一方、ほとんど学術的文書とは言い難いものであるということです。

たいていの教養のある人ならば、人類の文明化の歴史における主要な出来事の一端に、イスラム科学の恩恵があることは周知のことです：古代のギリシャ科学から中世ヨーロッパへの伝達です。この過程でのイスラム科学の役割は、単にメッセンジャーだったというのではなく、科学革命の重要な生成者というべきもので、このイスラム科学の働きがなければ、ヨーロッパはもしかすると決してルネッサンス時代へと進むことができなかつたのかもしれない。つまり、代数からアルゴリズムへ、イスラム科学は西洋の科学的殿堂において燦然とした功績を残したわけです。その過程で、イスラム科学は非イスラム文化に対して寛容で、時に非イスラム文化をはぐくむことすらしたわけですが、このことはその後、ヘブライの学術界やアラビアスペインの詩的技法が前例のないほど繁栄したことで明らかなです。

けれども、2001年の今、イスラム科学とは何を意味するのでしょうか。[P③] イスラム化学やイスラム量子力学なんてものがあるのでしょうか。そうは思えません。私はあるアラブ人の生物学者を賞賛し尊敬しているのですが、彼は私と同じ分野で秀でた仕事をしており、また同僚の遺伝学者は、外では砲弾が鳴り響いている環境にもかかわらず、ある健康関連のプロジェクトでパレスティナの臨床医たちと共同研究しています。私はこのアラブ人の研究仲間を高く買っているのですが、その理由は彼が一流の学者だからであって、彼がイスラム科学の

代表者だからというのでは決してありません。そもそもイスラム科学という分類を彼がひどく嫌がる (abhor) だろうと、私にははっきりとわかります。

『イスラム科学に関わって』いるのだからこそ、我々は一般市民に対する無慈悲な攻撃を防ぐべきだという貴殿の御説ですが、これはもはや新植民地主義者の家父長主義を表す鈍感な (crass) 例 [P④] に過ぎず、イスラムとしてレッテルを貼られた科学者 [P⑤] たちに対する侮辱でさえあります。私の祖先は聖書の編纂にささやかながら貢献したのですが、だからと言ってそれは私が“目には目を”の精神で生きていることを意味しているのではないのです^{註3)}。それは、イギリス人でクリスチアンの私の同僚らが、かつてナチスに脅された際、聖書にならって次に左の頬を差し出さなかつたのと同じことなのです [P⑥]。

イスラムの科学者と西洋の科学者間の共同研究 (collaboration) を促進することがテロの戦いにおいて効果的な手法である、との貴殿の提案は、あまりに無思慮に (so carelessly) “イスラム”の科学者としてカテゴライズされた人たち [P⑦] によって、手始めに、何よりも先んじて拒絶されることと思います。豊富な資金を持つ国際的犯罪組織の輩^{註4)}は、ただ無差別な殺傷のためだけに西洋の科学の神髄を使っているのですが、彼らはおよそイスラム科学とは関係がないのです、それはボストン絞殺魔^{註5)}がアメリカ創立の父たちと関係がないのと同じです [P⑧]。

1) オピニオン記事

いかにも辛辣なこの書簡の作者は、エドガー・ピック (Edgar Pick)、イスラエルのテルアビブ大学、サックラー医科大学の生化学者である^{註6)}。彼の代表的な仕事の一つである Activation of NADPH-dependent superoxide

production in a cell-free system by sodium dodecyl sulfate.^{註7)}では、初めて試験管内でのオキシダーゼ酵素の再構成に成功し、その後の「生体防御における活性酸素の役割」の研究発展に著しく寄与した。生化学者として抜きん出た研究者であるのは言うに及ばず、数か国語を自在に操る語学センスは、ピックの人となり語るにあたりよく言及される魅力の一つである。

今回、そのピック流のシニカルな文面を最も特徴づけるのは、オピニオン記事の編集者に対して子ども扱いするかのように、慇懃無礼な語り口調で綴られていることである。例えば、この短い書簡の後半で二度繰り返し使われる“～もまた～でない (neither) [P⑥]”，あるいは逆に，“～と同じように～である (as ~ as) [P⑧]”といったレトリックは、極端な例を引き合いに出すことによって強い印象を与えている。とりわけ、結びの一文に関しては、「国際的犯罪組織の輩」と「イスラム科学」の無関係さを、「ポストン絞殺魔」と「アメリカ創立の父たち」との関係性を持ち出して強調するという大胆さがあり、ここにはピックの隠しきれない苛立ちが伺い知れる [P⑧]。

ところで、ピック書簡の方を先に目にした場合、当てこすられた元のオピニオン記事はさぞかし不当な内容だろうと想像するかもしれない。しかし、誤解を恐れずに言えば、記事自体はいたって抑制的に、またある意味常識的な内容のものである。以下、概要を紹介すると、

*下線部 [O①～②] は筆者によるもので、この後に言及する個所である。

オピニオン記事『テロとの戦い、イスラム科学に関わって』¹⁾では、編集者はまず、今回のアメリカでの何千人もの野蛮な殺戮 (the barbaric killings) [O①] に科学界も衝撃を受けたこと、そして多くの科学者がそれに対して発言していることを伝える。そして、科学が犠牲者

の身元の特定等に貢献するだろうこと、また今後の新たなテロを抑止するために優れた科学者たちの専門知識が——具体的には、セキュリティ革新や対テロの諜報活動、また軍事力の強化において——求められるだろうことを述べる。そのうえで、現況を受けた科学者はそうした要望に十分に答えたくなるだろう、と彼らの心理を押し量っている。しかし続けて、かつて第二次世界大戦中、科学者たちが無言のうちにも (quietly) 同盟国の勝利に加担したことに言及しているが、この「無言のうちにも」という言葉には、編集者の第二次世界大戦当時の“科学者と戦争”とのかかわり方に対する批判的な意見が投影されているだろう。

したがって、次に編集者が述べる「科学の役割」は、先に挙げたような具体的な科学的貢献ではなく、科学者および科学的組織間の交流 (contacts) が建設的役割を果たすことである。また、確かにアラブ世界やアジアでは、イスラムの過激主義的な傾向が強まっているところもあり、そうした再起するイスラムにより勇気づけられる人の存在を指摘するコメンテーターの見解も紹介しているが、そうした傾向は不均一 (no uniformity) なものであり、イスラムは多様 (diverse) なものであり、[“そういうイスラムの異種混交性 (heterogeneity) を理解することが重要なことだろう”]、と主張している [O②]。

最後に、「啓蒙主義の観点」として、編集者はイスラム世界が西洋科学を取り入れる際に、そこに付随するイスラム世界の慣習や規律とは相いれない西洋的価値観があることを指摘し、イスラムが西洋科学を導入することの難しさも示唆する。また、イスラム科学と西洋科学の歴史に対する認識が少ないことや、必然的結果として生じるお互いの相互理解の欠如を指摘しつつも、イスラム世界は、科学の価値および科学史とその重要性について同じ信念を共有する余地があると述べている。そして最後に、イスラム

と西洋の科学者間の共同研究 (collaborations) を促進すべきであり、今がその良い機会だ、と締めくくっている。

先に述べたように、この記事は常識的なものと言えなくもない。対して、この記事を批判したピック書簡の指摘や皮肉の中には、非本質的な箇所もある。例えば、ピックは編集者が「争い (conflict)」という言葉で、今回のテロに対して用いたことに、「美しい表現」だと皮肉を言う [P①]。実のところ、オピニオン記事では、「争い」という言葉は、第二次世界大戦についても同様に用いられており、編集者は言葉のセレクトにそれほど注意を払わず、単に「争い」や「戦争」の意で用いているようである。また、冒頭でテロを「野蛮な殺戮 (the barbaric killings)」 [O①] と表現しているところを見ても、今回のテロを軽視しているわけではない。

また、編集者が「旅客機を摩天楼に突っ込ませることによって、イスラムとして文化的アイデンティティが高められた人々への理解を持つべきだ」との見解を示している、とピックは批判している [P②]。しかし、前後の文脈を考慮すれば、編集者の意図とは異なることがわかる。編集者は確かに“再起するイスラムによって勇気づけられる人”もいるというコメンテーターたちの見解を紹介はするのだが、より重きを置こうとしているのは、一部の過激派ゆえにイスラム全体が非難されるべきではなく、イスラムの異種混交性を理解することの重要性だった [O②]。語学感覚に秀でたと誉高いピックが読み間違えたとは思えないのだが、私としては、ピックが早合点してしまい兼ねないほどに、あるいは、言葉の端々にまで、敏感に反応してしまうほどに、彼が憤りにも似た違和感を持ったのだろうと想像する。

2) 「科学は普遍的」

オピニオン記事は美しすぎるくらいはある。革新的な提案や指摘のないままに、当たり障りのない (と思われる) 内容を語り、イスラムと西洋の「交流」や「共同研究」を呼びかける。しかし考えてみれば、交流を呼びかけるということは、必然的に“違い”を前提としたものであり、《西洋⇔イスラム》という二つの異質な世界があることを暗に示している。そこで改めてピック書簡を念頭に置くと、想像できるのは、ピックはオピニオン記事のタイトルを目にした瞬間、既に大いなる反感を抱いたのだろうということである。「イスラム科学」なる概念自体、そしてその名称を平然と用いることの無神経さ自体が、ピックにとっては許されざる行為として映ったのではないか。長い歴史の中で様々な知識や技術が複層的に絡み合い発展してきた現在の科学に、何らかの帰属性を付与したり表明したりすることは、もはやナンセンスである。そのあたりを容認しかねるのが、ピックという人なのかもしれない。いや、ピックばかりでもない。

思い起こされるのは、9月16日付のイギリスの『ガーディアン』紙上に掲載された、次のようなサイドの一説である。「“イスラム”と“西洋”というのは、盲目的に従うにはあまりに不適切な旗印である」³⁾。エドワード・W・サイド (Edward Wadie Said) は、20世紀後半を代表する知識人であり、また世論に直接的な影響を与えた稀有な文化人の一人だった。主に西欧の中東へのまなざしを、例えば《自己・他者》あるいは《中心・周縁》ともいえる概念で紐解いた『オリエンタリズム』^{註8)}が、その代表作として知られる。1935年にエルサレムで生まれ、その後プリンストン大学とハーヴァード大学で学位を取得、1963年にニューヨークのコロンビア大学に初任して以来生涯、2003年に亡くなるまで教鞭をとっていた。そのサイドの言葉は重

い。彼は常に、“わたしたち”と“かれら”を考えてきたからである。一例として、親交の深かった大江健三郎との往復書簡を取り上げてみるが、サイドの書簡はテロ後の「ニューヨークにて」⁴⁾書かれたものである。

2002年の年初、大江はサイドにあてた書簡の冒頭、最近の自分の仕事としてアメリカとイスラムの若者によるテレビの討論番組の立会人を務めたことを述べ、その際アメリカの学生が「遅れている『かれら』に、『わたしたち』の民主主義を与えれば、すべて解決する」という趣旨の発言をしたことに触れている⁴⁾。続けて、大江はこうした若者らに「サイドの本も読むように」すすめたのだ、とサイドを持ち上げる⁴⁾。特に『戦争とプロパガンダ』、『文化と帝国主義』の2冊を挙げているが、中でも後者において「すでに雑種ハイブリッド的で、異種混交ヘテロジニアス的で、国境を横断し、こまかく差異化されてゆく文化の時代」に、アメリカがどのような役割を果たせるのか、という疑問を提起したサイドに共感を示している⁴⁾。

この書簡から一週間も経ずして書かれたであろう大江への書簡では、サイドは刻々と濃くなるアメリカの排他主義的色彩を、半ば自虐的に披露している。彼は15歳で渡米して以来、50年以上経って「いまふたたび自分が途方に暮れたよそ者に戻ったような気持ちにさせられている」と述べ、「公敵にされるって、どんな気分？」と友人に訊かれたエピソードを明かす⁴⁾。サイドが私信として飾らない率直な気持ちを伝えていることは興味深いだけでなく、当時のニューヨークの空気感を伝える証言としての価値もある。サイドは「当局から敵として名指しされた」現在の、アメリカでの「私たち」が受けている不当な対応を例に挙げ、深い憂慮を示している⁴⁾。

しかし「私たち」とは、誰のことだろう。実のところ、サイドの「私たち」が指す対象は、

その文脈によってさまざまに変化する。パレスティナ人に対して、アラブ社会に対して、アメリカ人に対して、ニューヨーカーに対して、知識人に対して、マイノリティーに対して——彼の複層的な視点や立場、寄り添う姿勢は、明確な境界を拒絶するように思われる。そしてそれは、当時のアメリカ大統領の口から発せられていた「我々の味方か、さもなければテロリストの味方」⁵⁾というレトリックを真っ向から否定するものである。

オピニオン記事掲載と同日の9月20日、テロ発生以降で初めてとなる議会演説で、ブッシュ大統領は、巧みに二枚舌的なレトリックを用いている。敵はイスラムではなくテロリストなのだ、と強調しておきながらも、例えば、テロリストを突き出すようにという要求を読み上げ、「テロリストを引き渡すか、さもなければ同じ運命をたどる」と言い、また件の「我々の味方か、さもなければテロリストの味方」と宣言する⁵⁾。「さもなければ (or)」という言葉が突きつける、いかにも単純すぎる二項対立的構図へと世界を歪曲しようというのである。しかも、サイドも指摘しているが、歪曲する力がアメリカには十分にある状態で、である。

最後に、ピック書簡の再読を通して印象に残ったのは、「イスラム科学というのは何を意味しているのか」[P③]というピックの反語的な問いである。オピニオン記事の編集者は、「イスラム科学」や「西洋科学」という名称を何の疑問も抱かずに使うが、そこには軽率で単純すぎるカテゴリーがある。しかも、「～科学」とカテゴリーすることは、裏を返せば、それに従事する「科学者」のアイデンティティもカテゴリーすることである。「レッテルを貼られた」[P⑤]や「あまりに無思慮に“イスラム”の科学者としてカテゴリーされた人たち」[P⑦]という表現で、ピックは編集者の安易なカテゴリーを端的に批判している。

オピニオン記事の編集者に見れば、そこに悪意は決してないのだろうが、ピックに見れば、その無頓着さこそ見過ごせないと感じたのかもしれない。編集者の提案を「もはや新植民地主義者の家父長主義を表す鈍感な (crass) 例」[P④]として一蹴した個所で、ピックが「鈍感な」と表現しているのが興味深い。何が“鈍い”のかというと、個人のアイデンティティという多様で繊細な事柄を悪意なく平然と他者がカテゴライズすることであるし、またその行為自体が既に的外れである（現場では、当然のこととして「～科学」という枠組みを超えた関係性を築いているから）ばかりか、侮辱にさえなるということに想いが至らないことである。つまり、社会的問題や歴史認識などに対する編集者の意識の低さ、を指して鈍いと言っているのだろう。

大江やサイドを再び持ち出すまでもなく、社会が極めて複雑で混然一体となった様相を呈している今、他者による一元的で軽率なカテゴライズなどナンセンスである。それは「科学」に限ったものではなく、芸術や文学などの分野においてもまた同様で、例えば「～文学」や「～芸術」などと、安易で一面的にカテゴライズすることに今やどれほどの意味があるだろうか。あるいは、学術的分野のみならず、スポーツなどの国際的なフィールドにおける「～人」や「～代表」というカテゴライズがいかにかに一元的な側面をしか表現しえていないことだろうか。そういう意味で、「科学は普遍的であり、いかなる宗教の一部でもない」というピックの指摘は、「科学」や「科学者」という枠組みを超えて、普遍的な価値を持つように思われる。

ところが、人間の本質的な欲求として、自らのアイデンティティに明確な定義を求めてしまう性質もある。IS（イスラム国）のようなプロのテロ集団は、それを負の方向へと巧みに利用し、アイデンティティの揺らぎや日常の不満に

付け込み勢力を拡大した。特に2010年代以降に欧州で散発したテロ事件の中には、欧州に在住しておりながらインターネットを通じて、そうしたテロ集団のプロパガンダに影響された者たちが起こした事件が少なくないように思われる。中にはクリスマスマーケットや花火鑑賞で賑わう人々めがけてトラックで突進するというような、何ら準備らしいこともない刹那的、またその手段も原始的で稚拙な事件もある。

「科学とテロ」という観点からすると、こうした攻撃を、綿密で長期的な計画に基づいて組織立った911事件や、大規模なプラントを作ってサリンを一から製造した事件と同列に語ることは適当ではないかもしれない。ISは、むしろ“誰にでもできる手段”を奨励して、実行犯たちをたきつけたからである。度重なるテロ事件のすべてを精査できているわけではないが、確固とした歴史観やイデオロギーに基づかない場当たり的で稚拙な、だからこそ一層やりきれない事件が多いのだが、しかしその根底には、いわゆる“マイノリティ”としての生き方やアイデンティティの揺らぎがあるという点では、ピックの指摘したようなカテゴライズの問題が潜んでいるとも言える。また、いずれにしても、現実社会では科学技術や知識が国際情勢や国家的戦略などと意図せずとも結びついていることもある。科学に携わる者はその研究や結果に責任を負うことを考えれば、科学者のアイデンティティと倫理観やイデオロギーに関する歴史的な検証や考察が、まずは今後の課題として残されていると考える。

註

- 1) 江川紹子:「カルト」はすぐ隣に。東京、岩波書店。2019
- 2) “…，whether Islamic or Icelandic?”のフレーズ。Icelandicは「アイスランドの」という意味で、唐突に出てくる印象だが、Islamicとの語呂や綴

りの類似性ゆえに用いられ、“いかなる宗教にとっても今回のテロ行為が許されざるのは至極当然”というピックの主張を強調している。また、ピック文章の軽快さやシニカルさが表れている箇所でもある。

- 3) 「目には目を」のフレーズは、ハムラビ法典での記載が有名だが、旧約聖書の出エジプト記21章24節にもある。
- 4) 「国際的犯罪組織の輩」とは、具体的にはテロリストのことを指すが、ピック書簡では“terrorist”および“terrorism”という言葉は(“terrorism”がカッコつきで一度使用されたのを除くと)全く用いられていない。軽々な判断はできないが、イデオロギーなどない“ただの無差別な殺人”というピックの見方を反映し、最大の非難を表しているのかもしれない。
- 5) 「ボストン絞殺魔 (Boston Strangler)」は、1962年から64年にかけて、アメリカのマサチューセッツ州ボストンで起きた残忍な連続殺人事件の犯人。
- 6) 2019年現在は同大学の臨床微生物免疫学部の名誉教授である。
- 7) Bromberg Y, Pick E. Activation of NADPH-dependent superoxide production in a cell-free system by sodium dodecyl sulfate. *J Biol Chem* 260:13539-13545, 1985
- 8) エドワード・W・サイド (板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳): *オリエンタリズム* 上下. 東京, 平凡社. 1993.
- 4) 大江健三郎: 大江健三郎全小説14. 東京, 講談社. 2019, pp709-720
- 5) <http://news.bbc.co.uk/2/hi/americas/1555641.stm> (2019.08.27)

引用文献

- 1) Fighting against terrorism, engaging with Islamic science. [No authors listed]. *Nature* 413: 235, 2001
- 2) Science is universal, not part of any religion. Pick E. *Nature* 414: 249, 2001
- 3) <https://www.theguardian.com/world/2001/sep/16/september11.terrorism3> (2019.08.27)

